

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 6 年 5 月 11 日現在

機関番号：11201

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20270

研究課題名（和文）芳賀矢一が編纂した中等教育の国語教科書に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A basic research on the Japanese language textbooks for secondary education
compiled by HAGA Yaichi

研究代表者

船越 亮佑（FUNAKOSHI, Ryosuke）

岩手大学・教育学部・准教授

研究者番号：40964474

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000 円

研究成果の概要（和文）：芳賀矢一が編纂した中等教育の国語教科書に関する基礎的研究を行った。調査・収集した16種の教科書について、その教材採録のあり方の特徴を見出すべく、目次を中心とするデータベースを作成した。また、収集した教科書に対し、芳賀の古典教育論及び国民教育論を結びつけた考察を行うため、芳賀矢一関係図書や教育史関係図書を入手し、考察に役立てた。芳賀が編纂した中等教育の国語教科書を網羅的に研究したことによって、欧米教科書調査の前後における編纂方針の違いや、古典教育および国民教育の位置づけの変容が少しずつ浮かび上がってきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

芳賀矢一の仕事と国語科教育界との関わりのうち、中等教育の国語教科書に関しては、研究が進んでいない。また、そもそも国語教科書の歴史研究は、初等教育に比べ中等教育の研究が大幅に立ち遅れている。本研究はそれらの進展に資するものである。

研究成果の概要（英文）：I conducted a basic research on the Japanese language textbooks for secondary education edited by HAGA Yaichi. I created a database of the 16 textbooks I researched and collected, focusing on their table of contents, in order to discover the characteristics of the way teaching materials were selected. In addition, in order to examine the collected textbooks in relation to HAGA's theories on classical education and national education, I obtained books related to HAGA Yaichi and books on the history of education, which I used in my study. Through comprehensive research into the Japanese language textbooks for secondary education edited by HAGA, the differences in editorial policy before and after the survey of European and US textbooks and the changes in the positioning of classical education and national education gradually emerged.

研究分野：国語科教育

キーワード：芳賀矢一 中等教育 国語教科書 古典教育 国民教育

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

芳賀矢一(1867-1927)といえば、近代「国文学」確立の立役者としてよく知られている。1900年から2年間のドイツ留学において文献学を学び、帰国後は東京帝国大学文科大学教授となった。その後、ドイツ文献学をもとに日本文献学を提唱し、国学の伝統を取り込みつつ「国文学」研究の方法論を鍛え上げた。

芳賀の「国文学」に関する初期の仕事として、立花銑三郎との共著『国文学読本』(1890)がある。立花の専門は、社会学・教育学であるため、「専門性から見ると、やはり矢一が主たる著者で、銑三郎はその語学力を活かして、西洋の知識を矢一に供給したものであるか」(佐々木孝浩『近代「国文学」の肖像 第1巻 芳賀矢一「国文学」の誕生』岩波書店、2021、p.32)と見られている。

この近代最初期の「国文学」選文集は、教育界に大きな影響を与えた。「それ以前の、漢文テキストに重点をおいたカリキュラムとは対照的に、政府の検定を受けた一八九〇年代以降の中学教科書は、明らかに芳賀、立花をはじめ国文学者による新たな国文学のモデルや文学史に啓発されて、いまや日本古典文学のカノンの部分をなすと認められた多くの和文ベースのテキストの抜粋を掲載することになった」(ハルオ・シラネ「カリキュラムの歴史的変遷と競合するカノン」、ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典 カノン形成・国民国家・日本文学』新曜社、1999、p.417)。芳賀は今日でいう古典教育の礎を形作ったのである。そして、その古典教育は、国民国家における国民教育とも密接に結びついていた。

したがって、芳賀が編纂した中等教育の国語教科書を考察することを通して、初期の中等国語科における古典教育及び国民教育の位置づけを跡づけることができると考えられる。

2. 研究の目的

問題の所在は、芳賀矢一が編纂した中等教育の国語教科書においてどのような国語科教育の実践が目指されていたかというところにあるが、それに答えることは、芳賀の仕事と国語科教育界との関わりの枢要な点を明らかにし、中等国語科と古典教育及び国民教育との関係を歴史的な観点から詳らかにすることに繋がる。本研究の目的は、芳賀が編纂した中等教育の国語教科書を考察することを通して、初期の中等国語科における古典教育及び国民教育の位置づけを跡づけることである。

3. 研究の方法

本研究が考察の対象とする教科書は、国立教育政策研究所教育図書館や東書文庫、また広島大学などの大学図書館に多くが所蔵されている。しかし、一部の巻は所蔵が確認できないため、調査を行う必要がある。

また、古典教育及び国民教育の位置づけを跡づけるためには、芳賀の古典教育論及び国民教育論と結びつける必要が出てくる。これには、「中等教育に於ける国文学史」(1903)や「古典と教育」(1911)といった教育論はもちろん、いくつかの国民性論が参考になる。

たとえば『国民性十論』(1907)は、芳賀の代表作とされるものの一つである。日露戦争後、欧米に広まった黄禍論を意識して、主に西洋人との比較から日本人の国民性を10の項目で論じた。本書は「当時の日本の社会に広く受け入れられるとともに、長く日本人論の標準となった」(品田悦一「国民歌集としての『万葉集』」、前掲『創造された古典』、p.60)。

しかし、注意しなければならないことがある。それは芳賀の国民性論が時代とともに変質していることである。たとえば、『国民性十論』において挙げられた「忠君愛国」について、欧米教科書調査の時期にイギリスを訪れた際、「忠君愛国と云ふことは、日本人の特色でも何でもない」ことを知ったと述べている(「戦時欧米漫遊所感」『芳賀矢一選集』第7巻、國學院大學、p.326)。このような変質に注意しながら、芳賀の古典教育論及び国民教育論を、教科書の考察に生かしていく。

芳賀が編纂した中等教育の国語教科書を考察することを通して、初期の中等国語科における古典教育及び国民教育の位置づけを跡づけるという本研究の目的は、次の2つで達成することができる。すなわち、所蔵が確認できない教科書の調査及び収集と、収集した教科書に対する芳賀の古典教育論及び国民教育論を適切に結びつけた考察である。

4. 研究成果

(1)

一年目、教科書を中心として、研究に必要な資料の調査・収集を進めた。調査・収集した教科書は以下の16種(中学校用国語教科書5種、女学校用国語教科書7種、師範学校用国語教科書4種)である。

- ・中学校用国語教科書：『中等教科明治読本』1905、『新定中学読本』1911、『帝国読本』1917、『帝国新読本』1924、『改訂帝国新読本』1927

- ・女学校用国語教科書：『新定女子読本』1912、『新定女子補習読本』1913、『改訂新定女子読本』1915、『女子国文』1917（1918）、『女子補習国文』1918、『女子新国文』1923、『改訂女子新国文』1923（1926）
- ・師範学校用国語教科書 4 種：『師範学校予科国語読本』1907、『師範学校明治読本予科』1910、『師範学校明治読本本科』1910、『師範国文』1921

これらの教科書について、その教材採録のあり方の特徴を見出すべく、目次を中心とするデータベースを作成し、各教科書の特徴が次第に見えてきた。また、収集した教科書に対し、芳賀の古典教育論及び国民教育論を結びつけた考察を行うため、芳賀矢一関係図書や教育史関係図書を入手し、考察に役立てた。

最終年度の二年目、前年度の取り組みを継続した後、年度途中より、収集した教科書 16 種の中から 1 種を取り上げ、その教科書に対する本格的な考察を行った。その研究成果については、研究期間の終了した二か月後の学会で発表することが、年度の終わりに決まった。

（ 2 ）

学会発表の題目は「芳賀矢一が編纂した『帝国読本』にみえる国語と国文学の思想」である。芳賀が編纂し、1917 年 11 月 8 日に富山房より発行された、『帝国読本』全 10 巻（東書文庫所蔵）を取り上げた。要旨は以下のとおりである。

1916 年 10 月、芳賀は文部省より欧米各国における教科書調査を囑託された。その少し前からすでに視察を始めていた芳賀は、たとえばアメリカで教育内容の実用性の高さに感銘を受け、日本の教育において参考にする価値があると日誌に記録している（「外遊日誌」『芳賀矢一選集』第 7 巻、p.262）。ハワイの教科書編纂に携わったのは、この時期のことである。欧米視察からこの世を去るまでの 10 年間に数多くの教科書編纂に携わった芳賀であるが、この欧米視察は以後の彼の教科書編纂のあり方に大きな影響を与えたものと思われる。

『帝国読本』にみえる国語と国文学の思想を端的にいえば、国家と「離るべからざる関係」にあり「国民団結の一要素」である国語、また共時的・通時的な「我が国民性」を理解するために有用な国語と国文学は、「国民教育の根本」であるとする思想といえる。重要なことは、それが世界に対する意識を内包する形となっていることである。全体として国民教育を志向する教材の目立つ『帝国読本』であるが、その国民教育に世界的市民としての日本国民教育が「編纂の理由」という重みをもって含まれるところに、この教科書の世界に対する強い意識があらわれている。

『帝国読本』は、芳賀がかねてから持っていた国語と国文学が「国民教育の根本」であるという考えと、「教育に依つて国民の自覚を喚起し、真に共同一致の精神を養ふこと」（「戦時欧米漫遊所感」『芳賀矢一選集』第 7 巻、p.335）の必要性を痛感するに至るなど欧米視察の時期に世界を強く意識したことが、複合的に反映された国語教科書であるといえる。

（ 3 ）

芳賀が編纂した中等教育の国語教科書を網羅的に研究したことによって、欧米教科書調査の前後における編纂方針の違いや、古典教育および国民教育の位置づけの変容が少しずつ浮かび上がってきた。

たとえば、古典教育に関して、明治期に発行された『中等教科明治読本』（1905）は、「古典教材が他と比べてきわめて少なく、ふつうは一〇パーセント前後であるのに対して半分の五パーセント」しかなく「芳賀の編纂方針がうかがわれる」と評価されている（井上敏夫編『国語教育史資料 第二巻 教科書史』東京法令出版、1981、p.260）が、大正期に発行された『帝国読本』は、そのいわゆる古典教材の数が増え 15 パーセント程度もある。ここから、芳賀の編纂方針が、時期によって異なることがわかる。

また、国民教育に関して、国語科教育界において有名な「最後の授業」は、教材として初めて教科書に取り上げられたのが 1927 年とされていた（府川源一郎『消えた「最後の授業」言葉・国家・教育』大修館書店、1992）が、『帝国読本』巻 2 に採録されていることがわかった。

他に、網羅的な研究を通して見えてきたこととして、1 種の教科書が改訂ごとに採録教材のあり方を大きく変えているということがある。『帝国読本』を例に挙げれば、この教科書は初版発行の翌年に 1 度目の改訂版が出ており、巻 1 の第 1 課から教材が変わっている。研究の質を高くするためには、考察の対象について選択と集中を行わなければならない。

これまでの網羅的な研究により明らかになったことをふまえて対象を絞り込み、今後は大正の欧米教科書調査の前後に編纂された教科書を対象に研究を行う。教科書の教材採録のあり方やその教材の言説に対する分析はもちろん、芳賀の古典教育論や国民教育論を丁寧に追った上で、それと編纂方針とを結びつけた考察など、教科書に関する総合的な研究を行っていく。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1．発表者名 船越亮佑
2．発表標題 芳賀矢一が編纂した『帝国読本』にみえる国語と国文学の思想
3．学会等名 全国大学国語教育学会
4．発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------